

# 十戒とクリスチャン

2022・1 益田静子

モーセが神から十戒を授かったのはシナイ山と呼ばれる場所であった。ホレブ山とも呼ばれる。613 あるモーセの律法の最初が十戒である。その内容とはどんなものなのか。ローマ 10:4には「律法が目指すものはキリストです」とある。律法の要求を全て満たしたのがキリストの十字架であった。メシアなるイエス・キリストを救い主と信じたクリスチャンにとって、モーセの律法はどんな意味があるのだろうか。また、神がイスラエル民族と結ばれた十戒の契約は、現代に生きる私たちに、どんな適用があるのかを見てみよう。

## 学びの概要

- I. 十戒の内容
- II. モーセの律法の目的と役割
- III. モーセの律法とイエス・キリストの関係
- IV. モーセの律法とクリスチャン：キリストの律法とクリスチャン
- V. 十戒の現代的意味と適用

旧約聖書の最初の五つ、モーセ五書（トーラー）は本来、一つの書物として書かれた。著者はモーセであり、カナンの地に入植する前のイスラエル人の為に書かれたものである。モーセ五書の文脈は以下の通りある。

- ・創世記…罪の起源と、罪を解決するメシアの到来について教えている
- ・出エ記…エジプトでの奴隷状態からの解放を記している
- ・レビ記…聖い神との交わりを維持する方法を教えている
- ・民数記…約束の地への旅と、その過程で起こった世代交代の事を記録している
- ・申命記…新しい世代に対して律法の内容を解説している

## I. 十戒の内容

### 1. 第一戒【申命記 5:6-7】

「6.わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である。7.あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。」

- ① 神は契約を結ぶイスラエルに対して、奴隷の地から導き出したあなたの神、主であると語っている。まず恵みがあり、次に律法の順番である。救われたものとして主に応答する方法として与えられたものである。「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。」これが第一戒である。これは基本中の基本であり、信仰の大切な第一歩である。申命記 4:35「あなたにこのことが示されたのは、主だけが神であり、ほかに神はいないことを、あなたが知るためであった。」とある。イザヤ 43:10-11「あなたがたはわたしの証人、——主のことば——わたしが選んだわたしのしもべである。これは、あなたがたが知って、わたしを信じ、わたしがその者であることを悟るためだ。わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にも、それはいない。わたし、このわたしが主であり、ほかに救い主はいない。」と預言者によって宣言されている。

- ② この第一戒は私たちの全ての存在、全ての生活の領域を主にささげるべきであることを命じているのである。第一の戒めの中にある「ほかの神」というのは異教の神々で偶像のことである。「ほかの神」というのは、実は実体はなく、偶像の形で存在しているのである。さらに偶像は、それを実行する人々の心の中に存在しているのである。第一戒の意味するところは、正しい神学を持って、この方以外に神はいない、神は唯一であるということである。だから自分の全存在をこの方に明け渡すのだと命じているのである。

## 2. 第二戒【申命記 5:8-10】

「<sup>8</sup>あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。<sup>9</sup>それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神。わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、<sup>10</sup>わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」

- ① 第二戒は真の礼拝とは何かを教えている。唯一の神は創造者であり、被造世界を超越している。それゆえ、その神を、目に見えるもの、つまり何かの被造物を持って表現することは不可能である。勿論、この戒めは芸術活動を禁じているのではない。絵を描いたり、彫像物を製作したりすることは素晴らしいことである。モーセも幕屋の中で用いるためにケルビムの織物やケルビムの像を造ったのである。第二戒が禁じているのは、礼拝のために像を造る事である。
- ② イザヤ 54:5-6「なぜなら、あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主はイスラエルの聖なる者、全地の神と呼ばれているからだ。<sup>6</sup>主はあなたを、夫に捨てられた、心に悲しみのある女と呼んだが、若いころの妻をどうして見捨てられるだろうか。——あなたの神は仰せられる——」ここでは神とイスラエルの関係は夫と妻の関係であると比喩的に語られている。そこから見ると偶像礼拝は靈的姦淫に当たる。夫が妻を愛するように神はイスラエルを愛している神だということである。主はご自身の栄光を偶像に渡すことはないという意味で主は妬みの神である。
- ③ 「わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、<sup>10</sup>わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」聖書が一貫して教えているのは父の罪のゆえに子が罰を受けることはないということである。「わたしを憎む者には・・・三代、四代にまで及ぼし」という文章の、わたしとは誰のことだろうか。父かそれとも子か。この文章の構造からいうと主語は子供である。なぜ「父の咎を子に報い」となるのかというと、父の悪い思い、罪の習慣が子供に影響を与えているという意味である。子供は父の悪影響を受けて主に敵対するようになる。この聖句が教えているのは先祖の罪の悪影響が子孫に及ぶということであって、子供自身が主に反抗しているわけである。主はその悪影響を三代、四代で止めてくださるのである。永遠に続くわけではない。
- ④ 10 節 先祖の良い信仰や行いによって子孫が救われるというのではなく、先祖の良い影響が子孫に及ぶということである。その場合は三代、四代ではなくて千代まで及ぶ。つまり末長く良い影響が続くということである。先祖にクリスチャンがいない場合は、自分からその良い影響をつくれればいいわけである。第二戒は「正しい礼拝をささげよ」ということである。

### 3. 第三戒【申命記 5:11】

「<sup>11</sup>あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない。主は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない。」

- ① 第三戒は、神の尊厳や性質を自分のレベルに引き下げてはいけないということを教えている戒めである。名前は実体を表すものであり、みだりに口にする、神という方の実体、本質を引き下げ、価値のない神以下のものとして扱うことに繋がって行く。実行する気もないのに、神の名によって誓うことも第三戒に違反となる。
- ② この戒めに関してユダヤ人たちは、神の御名を口にするのを恐れて御名そのものを発音しなくなった。それほどに徹底していた。11 節で「主」と訳されている言葉が、ヘブル語でそのまま読むと「ヤーハウエー」となる。「ヤーハウエー」を発音することを恐れてユダヤ人達は「アドナイ」と読み替えたのである。
- ③ 日本語では「我が主」英語では「My Lord」となる。神の名を口にする時、真に神を神として崇めているか、神の名を使って自分に都合の良いことを言おうとはしていないか、主の前に低くなる必要がある。

### 4. 第四戒【申命記 5:12-15】

「<sup>12</sup>安息日を守って、これを聖なるものとせよ。あなたの神、主が命じたとおりに。<sup>13</sup>六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。<sup>14</sup>七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、牛、ろば、いかなる家畜も、また、あなたの町囲みの中にいる寄留者も。そうすれば、あなたの男奴隷や女奴隷が、あなたと同じように休むことができる。<sup>15</sup>あなたは自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸ばされた御腕をもって、あなたをそこから導き出したことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守るよう、あなたに命じたのである。」

- ① 第四戒は安息日の規定である。土曜日は労働を休みなさいという定めである。これは神との契約関係に入ったイスラエルの民にとって特別な意味を持っていた。神は6日間で全てものを創造された。そして7日目に休まれた。そこに起因している。契約にはしるしが伴うことがある。
- ② 例えばノアの契約のしるしは虹であった。アブラハムの契約のしるしは割礼であった。十戒の結ばれたシナイ契約のしるしは安息日である。安息日は神から恵みの贈り物として与えられたものである。出エジプト 31:13「あなたはイスラエルの子らに告げよ。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるしである。わたしが主であり、あなたがたを聖別する者であることを、あなたがたが知るためである。」
- ③ この安息日の規定はイスラエル男女の共同体だけではなく、男・女奴隷や牛、ロバなどいかなる家畜にも適用される。更に寄留している異国人も安息日の祝福に与えることができるものである。安息日はシナイ契約のしるしである。
- ④ 安息日には思い出すのである。何を？自分たちの先祖はエジプトにいた時は休みもなく、奴隷であったこと、また神はそこから解放してくださったことを。と同時に七日目に仕事を休むことや、7年に一度土地を休ませる安息年を守るということを通して、主が全ての必要を満たし

てくださることを学び取っていくわけである。今や奴隷ではなくなったこと、主が全ての必要を満たしてくださる方だと信頼して本来の自分に戻り、神との交わりを深くし、霊的生活を立て直す素晴らしい時間が安息日にはある。

⑤ 安息日の規定というのはモーセ契約・シナイ契約を締結しているイスラエルに与えられたものである。新約時代の私たちに与えられたものではない。律法は旧約時代の聖徒たちの行動基準であった。ローマ 10:4 には「律法が目指すものはキリストです。」とあるようにイエスの到来、十字架によって新しい時代がやってきたのである。つまりイエスを信じる者にとって土曜日安息の時代は終わり、毎日が生活を通して主を礼拝する時代になったのである。現在、世界中の教会は、キリストの復活を記念して、週の初めの日に定期的に集まっていることが多い。

⑥ まとめ

十戒は一戒から四戒までは、神と人の関係、特に神とイスラエルの関係が規定されている。イスラエルの民はエジプトから導き出され、神と契約を結び、これから神の民として使命を果たしていくのである。戒めは彼らを束縛するためのものではなく、彼らを祝福し、自由にし、彼らを用いるためのものである。

## 5. 第五戒【申命記 5:16】

「<sup>16</sup>あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が命じたとおりに。それは、あなたの日々が長く続くようにするため、また、あなたの神、主があなたに与えようとしているその土地で幸せになるためである。」

① モーセの律法は両親を敬うことの重要性を教え、また強調している。一戒から四戒は神とイスラエルの関係であり、五戒から十戒は人と人の関係である。人の関係の最初に出てくるのが両親を敬えという戒めである。これが神にとっていかに重要であることを示している。

② 「敬う」ということは両親の価値を高く評価するということである。両親を敬うということは神の立てた秩序と権威に従うということと直結するのである。大切なポイントである。

③ 両親に持っている反抗は神に対して投影され、敵対関係になる可能性が高い。社会に向かっても同様である。痛みに向き合って、苦しみや罪を扱い、癒しの段階を踏み行く必要がある。

④ この戒めには約束が伴っている。個人的な長寿というよりもイスラエルの民が民族として約束の地で平安のうちに永く住むようになるという約束である。両親を敬うことが民族として永く生きるための鍵であると教えているのである。両親を敬うことが社会の構成単位である家族を守るための神の方法である。家族が崩壊するとその社会は成り立たない。家族が健全であれば結果としてその地で永く生きることができるのである。両親への従順は創造の秩序への回復であり神に喜ばれることである。

⑤ イエスと第五戒

ルカ 2:51-52 「それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。<sup>52</sup>イエスは神と人とにいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。」これはイエスがエルサレムに行って両親と別れて一人留まって、律法学者と議論していたというエピソードの最後の締めくくりの箇所である。これは第五戒の実行である。少年として 12 歳頃のイエスがこのことを実行しているわけである。イエスはメシアとして来られました。この方がモーセの律法を破ったことは一度もないのである。

⑥ 虐待する親や暴君的親であっても、第五戒「父と母を敬え」は適用されるのだろうか。現代的

課題と共に、後に改めて取り上げることにする。

## 6. 第六戒【申命記 5:17】「殺してはならない。」

- ① 第六戒は命の尊厳を教えている戒めである。なぜ人の命が尊いのか、その理由は「命は神によって創造された」からである。人は神によって造られ、内面は神のかたちに創造されている。なぜ、人を殺してはいけないのか。その最大の理由は神の最高傑作として造られたからである。
- ② クリスマスはこの上に立っている。何かができる有能な人だからとか、魅力的な人だからということではなく、全ての人を神の作品であるということに土台がある。
- ③ 殺すということは利己的な理由で人の命を故意に意図的に奪うことである。そして自殺もまた自分の命を奪うことなので第六の規定に違反するのである。
- ④ 第六の戒めをもって「死刑禁止」を叫ぶグループがあるがそれはどうだろうか。第六戒は神が死刑を命じる場合を除いて、人を殺す者は死刑になるという考え方は妥当である。
- ⑤ 神が死刑を命じる場合としては、レビ記 20:10 のケースがある。「人が他人の妻と姦淫したなら、すなわち自分の隣人の妻と姦淫したなら、その姦淫した男も女も必ず殺されなければならない。」現代はこの罪を軽く扱っているように感じる。この戒めは結婚の尊厳を守るためであり、家族制度を維持するためである。又、申命記 13:15「あなたはその町の住民を必ず剣の刃で討たなければならない。その町とそこにいるすべての者、その家畜も剣の刃で聖絶しなさい。」これは偶像礼拝を扇動した者への裁きである。偶像礼拝を扇動した者は剣の刃で討たなければならない。このように神ご自身が死刑を命じておられることがある。
- ⑥ 故意の場合と過失致死の場合  
民数記 35:21「または、敵意をもって人を手で打って死なせたなら、その打った者は必ず殺されなければならない。その人は殺人者である。その血の復讐をする者がその殺人者に出くわしたときには、彼を殺してもよい。」故意に殺人を犯した者は、そのものは必ず殺されなければならないと言っている。しかし、過失致死の場合、犯人は逃れの街に逃げ込むことができる。故意なのか過失致死かを現実に区別している。
- ⑦ イエスと第六戒  
マタイ 5:21-22「昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。22.しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」  
イエスは殺人を単に人の命を殺すだけでなく、心の状態にまで拡大しておられる。つまり心の中で怒っていることが殺人という行為に出てくるのであって、イエスは心の中の状態を問題にしているわけである。
- ⑧ パリサイ人は口伝律法をたくさん作った。口伝律法とイエスのモーセの律法の解釈の間には大きな違いがあった。一番の違いは何か。パリサイ人は外側の行為にこだわっているが、イエスは内側の腐っている心を問題にしたことである。神を愛するということは隣人を愛することであり、人を殺してはいけないという意味である。

## 7. 第七戒【申命記 5:18】「姦淫してはならない。」

- ① 第七戒は結婚関係の尊厳を教えたものである。結婚という制度は神がお造りになったものであり、神聖な制度である。結婚はキリストと信者の関係が投影されており、キリストが教会を愛されたように、教会はキリストに従う型であると言える。
- ② 聖書は結婚関係を祝福しておられ、結婚関係という枠内における男女の肉体的交わりを祝福しておられるのである。
- ③ それゆえ結婚関係以外で起きる性的な罪は全て第七戒違反になる。結婚している人が犯す罪は、相手に対する裏切りになるのである。ヘブル 13:4「結婚がすべての人の間で尊ばれ、寝床が汚されることのないようにしなさい。神は、淫行を行う者と姦淫を行う者をさばかれるからです。」と教えている。

## 8. 第八戒【申命記 5:19】「盗んではならない。」

- ① 第八戒は私有財産に対する戒めである。神は私たちの命を尊いと見なしてくださっているだけでなく、私たちが所有しているものまでも評価し、認めておられる方である。一人一人が私有財産を持つことを許されている。それを他人が盗むことを禁じている。他人のものを盗むのは他人の権利を侵害していることである。
- ② エペソ 4:28「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい。」盗むという行為は、自分が自分の思い通り生きる権利があると宣言していることであり、神が自分を支えて導いてくださるということを信じないで盗むのである。旧約も新約においても盗みを禁じている。

## 9. 第九戒【申命記 5:20】「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない。」

- ① これは神のご性質から出ている戒めである。神には偽りがなく、暗いところが全くない聖いお方であられる。第九の戒めは真実の大切さを教えているものである。
- ② 個人的につく嘘や法廷での偽証や、口にのせる噂話などは、全て多くの人に影響を与えるものである。偽証や噂話は隣人を傷つけ、隣人の領域に足を踏み入れる言葉の暴力である。隣人について偽りの証言をしてはいけないという命令である。
- ③ エペソ 4:25「ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部分なのです。」これは信者に言われている言葉である。からだの一部分というのは、お互いがキリストのからだなる教会に連なっている部分であり、同じからだに属しているのだから、隣人に対して真実を語りなさいとパウロは命じているのである。

## 10. 第十戒【申命記 5:21】「あなたの隣人の妻を欲してはならない。あなたの隣人の家、畑、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲しがってはならない。」

- ① 第十戒は行為そのものではなく、心の問題を扱っている戒めである。「欲しがってはいけない」は心の問題なのである。全ての人は貪欲という内面の罪を持っている。なぜ貪欲という罪が出てくるのかというと、他人のものを手に入れたら幸せになれるという誤解から派生しているからである。それが貪欲の本質である。

- ② 貪欲は「神は必要を満たしてください」という信仰に反する心の動きである。第一から第九までの戒めは全て貪欲から生れる罪なのである。全ての罪は貪欲から始まるのである。その意味でも第十戒は非常に重要な戒めであると言えるのである。
- ③ コロサイ 3:5「ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」  
貪欲がなぜ偶像礼拝なのか？狭い意味で、偶像礼拝というのは目に見える形で偶像を作って、それを礼拝するということである。もっと広い意味では、偶像礼拝というのは心の問題でもあるのである。偶像礼拝は神以外のものを第一として生きるということである。パウロは偶像礼拝は単なる形を作って礼拝する問題ではなく、心の問題であり、貪欲が偶像礼拝だと言っているのである。
- ④ 第十戒が重要なのは、これで十戒の鎖の輪が完成するからである。どういう意味かということ、第一戒と第二戒は神が唯一である。そして偶像を造ってはいけない。まことの神以外を礼拝してはいけない。つまり偶像礼拝を禁じたものである。第十戒では、貪欲は偶像礼拝だということを扱っていて、もう一度偶像礼拝のテーマに戻って行くのである。第一戒から第十戒まで読んでいき、第十戒まで来ると、再び第一戒、第二戒に繋がって行くというサイクルになっているわけである。

モーセの律法は古代世界では極めて稀な道德法であった。これは時間とともに古びることがない普遍的な道德法である。その影響は現代に至るまで続いているのである。契約の民であるイスラエルの場合、神への信仰の表現が道德的な行為となって現れた。旧約時代、神を信じるということは、モーセの律法に従って生きることを意味していた。大きな意味と役割があった。しかし、メシアの出現によって、十字架のわざによって状況は一変したのである。モーセの律法の全体が終わって、もう無効となったのである。無効となった理由は何か。モーセの律法とイエスとの関係、そして十戒とクリスチャンについて次に見ていこう。

## **II.モーセの律法の目的と役割**

1. モーセの律法は救いの方法ではない…モーセの律法は救われる方法として示されているのではない。
2. モーセの律法は神が聖であることを示している…レビ記 11:45 モーセの律法の中心である。
3. モーセの律法の目的は旧約時代の聖徒たちの行動基準である
4. モーセの律法は、人の罪を示す役割を持っている
5. 人にもっと罪を犯させる力となる…ローマ 7:7 律法は悪でも罪でもない。「隣人のものを欲してはならない」との律法がなければ、人間は欲望を知らなかった。その意味で律法というのは、人の罪を示すのと同時に、人の罪の性質が活動を始めるのを導く力となる。
6. 人を信仰に導く役割がある…ガラテヤ 3:23-24
7. モーセの律法は既に終わった、今はキリストの律法が与えられている

## **III.モーセの律法とイエス・キリストの関係**

モーセの律法は終わった。今はキリストの律法が与えられている。

1. ローマ 10:4「律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられる

のです。

「律法が目指すものはキリストです」と書かれている。つまり、キリストは律法の要求を満たされたという意味である。キリストの十字架によって613ある律法の全てが要求していることを完成されたのである。イエスは十字架の上で「完了した」と語られた。律法が目的としていたことを、キリストの血によって成就したのである。モーセの律法の効力は消えたということである。キリストを救い主と信じるものに救いが与えられる新しい時代を迎えた。

2. ガラテヤ 3:19「それでは、律法とは何でしょうか。それは、約束を受けたこの子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたものです。」

「約束を受けたこの子孫が来られるときまで」とは、メシアなるキリストのことである。モーセの律法は、メシアが来られるまで違反を示すために付け加えられたものであると書いてある。つまり、人々に罪と違反を示す役割をもっていたが、メシアが来られるまで、一時的に与えられたものであるということである。だからメシアの登場とともに、この律法は終わるのである。

3. マタイ 5:17-18「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、とってはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。18まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。」イエス自身がモーセの律法と自分の関係を述べている。

4. ヘブル 7:12「祭司職が変われば、必ず律法も変わらなければなりません。」

- ① 旧約聖書の最初の五つの書（モーセ五書あるいはトーラー）は、本来は一つの書物として書かれたもので一貫しているものである。モーセの律法というのは613あり、統一体である。モーセの律法は全部終わったか、全部残っているかのどちらかである。ある一部が終わり、ある一部が新約時代にも残っているということはないのである。ある人達はモーセの律法の中の祭儀法、儀式に関する法律と民法は終わったが、道徳法は今も有効であると主張する人がいるが、ヘブル 7:12 を見てみよう。
- ② モーセの律法を運用する土台は何かと言うとレビ族から出た祭司である。モーセの律法を運用する中核になっているのが大祭司である。ヘブル人の手紙が論じている祭司職はアロンの大祭司から、メシアなるイエスに変わったということである。イエスはレビ族ではなく、ユダ族から出た祭司である。だから祭司職は変わったのである。レビ族から出たアロンの家系が大祭司になるのではない。イエスはメルキゼデクの位の祭司職についたと言われている。つまり、大祭司は変わったのである。ということは律法も変わらなければならない。私たちの大祭司がモーセの律法に基づく大祭司ではなく、新しい律法に基づく大祭司であるということは、地上の幕屋・神殿ではなく、天にある幕屋で仕えておられるということからもわかるのである。モーセの律法が終わったというのは、旧約聖書の祭司職が終わったということである。
- ③ 新しい祭司職が立てられたということは、モーセの律法ではない、新しい律法が与えられたということである。その新しい律法のことを「キリストの律法」と聖書は呼んでいるわけである。新約になって十戒、あるいはモーセの律法全体が機能しなくなっていると言えるのである。

5. マルコ 12:28-31 「律法学者の一人が来て、彼らが議論するのを聞いていたが、イエスが見事に答えられたのを見て、イエスに尋ねた。「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」<sup>29</sup>、イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。<sup>30</sup>あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』<sup>31</sup>第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」

「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」との質問にイエスは答えられた。イエスは 613 ある律法を二つにまとめ、旧約時代の律法がこの二つの戒めにかかっているとお答えになった。十戒の命令を要約すると、神と隣人を愛すること、この二つに要約できる。

6. マタイ 26:27-28 「また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。」<sup>28</sup>これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です」

古いモーセの契約 613 からなる律法は、キリストの十字架によって無効となった。モーセの律法が無効となるためには血が必要であった。キリストは十字架にかかる前の日、最後の晩餐の席で愛する弟子たちにこう語られた。「みな、この杯から飲みなさい。<sup>28</sup>これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。」キリストは罪を赦すためにご自身の血潮を流されることで新しい契約を結ばれたのである。

7. ローマ 13:8-10 「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことは別です。他の人を愛する者は、律法の要求を満たしているのです。<sup>9</sup>「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない」という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」ということばに要約されるからです。<sup>10</sup>愛は隣人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです。」

十戒の中で、第四戒「安息日を守って、これを聖なるものとせよ」以外は全て、「キリストの律法」に再度出てきている。<sup>10</sup>のうち9つまでがキリストの律法に出てくるのである。だから注意して見ていないと十戒がまだ、そのまま生きているかのように見えてしまう。十戒は全部終わったのである。モーセの律法の全体が終わって、もう無効になった。では、なぜ、十戒は生きているかのように見えるのか。それは十戒の中の9つまでキリストの律法に再度出てくるからであろう。

私たち新約時代に生きる信者は、モーセの律法に束縛されているのではない。私たちが従うべきはキリストの律法である。キリストの律法の本質を短く説明している一番良い箇所がローマ 13:8-10 である。パウロはここで何と言っているか。つまり、愛は律法の要求を満たすものであるということである。

#### **IV.モーセの律法とクリスチャン、キリストの律法とクリスチャン**

##### **1. モーセの律法とクリスチャン**

① エペソ 2:12 「そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。」

イエスをまだ信じていない私たち異邦人は、この世にあって望みもなく神もない者達であった。そして、約束にも預かっていない者である。この節で大事な点は、「約束の契約」である。原文は

複数形であり、神がイスラエルと結んだ複数の契約があるが、それらとは無関係であったと言っているのである。神がイスラエルと結んだ無条件契約というのは四つある。

- (1) アブラハム契約
- (2) 土地の契約
- (3) ダビデ契約
- (4) 新しい契約…私たちが新約と言っているのが新しい契約のことである

② エペソ 2:14-16 「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、<sup>15</sup>様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、<sup>16</sup>二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

- (1) 私たち異邦人は、元々はこれら四つの契約とは全くの無関係だった。他国人であった。けれどもイエス・キリストを信じる信仰によって、無条件契約の祝福に預かることができるようになったのである。なぜ、元々は他国人であった私たちが、無条件契約の祝福に与るようになったのか、その理由は、エペソ 2:14 「隔ての壁である敵意」が打ち壊されたからであると言っている。「隔ての壁」とはモーセの律法のことである。モーセの律法がユダヤ人と異邦人を隔てていたということである。実際にエルサレムの神殿には、異邦人の庭と婦人の庭を隔てる壁があった。異邦人がいくら聖所に近づきたいと思っても神殿の中には入れなかったのである。高さが 1.2 メートルの隔ての壁があって乗り越えると死刑になった。パウロは「隔ての壁」という言葉をそのまま使って、キリストは「二つのもの」を隔てていた障壁を取り除かれたと語っている。
- (2) 障壁は何によって取り除かれたのか。それはキリストの十字架によってである。十字架のわざによって、モーセの律法を無効にされたので、ユダヤ人と異邦人が一つになったのである。モーセの律法はイエス・キリストの死によって、取り除かれた。だから、もはやモーセの律法に従って生きる必要は全くないということである。

## 2. キリストの律法とクリスチャン

① II コリント 3:6-8 「神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。文字は殺し、御霊は生かすからです。<sup>7</sup>石の上に刻まれた文字による、死に仕える務めさえ栄光を帯びたものであり、イスラエルの子らはモーセの顔にあった消え去る栄光のために、モーセの顔を見つめることができないほどでした。そうであれば、<sup>8</sup>御霊に仕える務めは、もっと栄光を帯びたものとならないでしょうか。」

- (1) モーセの律法が無効となったならば、クリスチャンには何が残っているのか。それはキリストの律法である。この文章で注目したいのは、「文字は殺し」という言葉である。「文字」というのは「石の上に刻まれた文字」と説明されている。これは何のことか。十戒のことである。モーセの律法は終わったけれど、十戒だけは有効であるという教えや考え方はこの聖句によって否定される。十戒も含めて文字は殺すのであり、御霊は生かすのである。ということは、「文字は殺す」というのは、律法（十戒も含めて）には義認の力も聖化の力もないということである。律法は人に罪を示し、人を殺す力なのだ。旧約の聖徒たちはモーセの律法を通して、血の犠牲の必要性を認識するようになった。罪を犯した時にいけにえの血を流す必要がある。いの

ちは血の中にある。だから、いのちを贖うために血を流すことが必要だということを彼らは学んで言った。それは一時的に罪を覆うだけであった。本当にその罪を取り除くのは御子イエスの十字架の贖い、身代わりの死なのである。それゆえキリストの福音を信じた人々は、大いなる希望があるのである。キリストの律法はキリストを信じた人の心の中に書かれている。

(2)人を義とし、聖化に導いていく力は何なのか。それは聖霊である。だから石に書かれた文字ではなく、神の霊がそのことを行なってくれるのである。

(3)文字に仕える働きは、人を死に定める働きであり、命を与えるものではなかった。それでさえも栄光に富んだものである。モーセの顔が光り輝いていたほどである。文字に仕えることが栄光に富んだものであるならば、ましてや御霊に仕えることが、栄光に富んだものであることは当然ではないか。命を与える御霊に仕える奉仕はなお一層栄光に富んだものである。今は石の上に刻まれた文字は取り除かれた時代であり、御霊が働く時代になっているのだということをパウロは教えている。

② ガラテヤ 6:2 「互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」

「キリストの律法」という言葉がはっきり出てきている。モーセの律法は終わった。石に書かれた文字の律法は終わった。それに変わってキリストの律法が、新約時代の信徒たちに与えられている。そのキリストの律法は御霊によって、私たちの心に書かれている愛の律法である。この律法は生きていて新約時代の信徒に与えられた祝福の律法である。互いの重荷を負い合う愛によって律法を成就するのである。

③ I コリント 9:21 「律法を持たない人たちには——私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者ようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。」

パウロは伝道する時、相手の立場に立つということを言っている。パウロ自身は、自分はキリストの律法を守る者と言っている。これがパウロがクリスチャンとして生活しているときに認識していた律法のことである。常に意識しておきたいことは何か。私たちの内側にある性質というのは、律法主義に陥りやすいということである。自分で律法を作って、自分と他人を縛り、苦しめることになりかねない。キリストによって与えられた救いは、恵みと信仰によってである。この神に、愛によって生きる応答がクリスチャンの生き方である。自分の力だけで愛を実践することは出来ない。常に神を見上げて私たちのうちに内住される聖霊により頼んで可能となる。

④ ガラテヤ 3:23-24 「信仰が現れる前、私たちは律法の下で監視され、来たるべき信仰が啓示されるまで閉じ込められていました。24.こうして、律法は私たちがキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。」

イエスを信じることによって救われるということが啓示される前は、どういう状態だったかという、私たちは律法の下に監視されていたのである。つまり律法がキリストに私たちに導いたということである。律法はわざによる救いが不可能であることを示している。その結果、私たちは信仰による救いを求めるようになる。そして、最終的には自分で自分を救うことができないと認め、キリストに対する信仰へと導かれるのである。

⑤ ヨハネ 15:12 「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」

613 あるモーセの律法を守らなければならなかった旧約時代のイスラエルと違い、私たち教会時代の信者は、ユダヤ人も異邦人も共に新しい戒め、キリストの言葉を守る事が、聖書の神を愛することなのである。「わたしがあなたがたを愛したように」と言われたように、常にイエスを見続

け、イエスから愛を受けて流す事である。

## V. 十戒の現代的意味と適用

### 1. 虐待、暴力をふるう両親でも、子は両親を敬うべきか

- ① 虐待を経験した子供でも両親を敬うべきなのか。虐待には暴力による肉体的虐待、性的虐待、言葉による暴力も虐待に含まれる。あるいは親から無条件に受け入れられて育つ環境ではなく、無視されたり、放置、放任されたり、愛を受けないで育ってしまう虐待もある。子供は養育過程で「自分は価値がない」という低いセルフイメージを形成してしまうことが多い。
- ② 基本的信頼感は親から愛され守られる中で形成されるが、虐待を経験すると、早い段階でヒビが入ってしまう。失敗や拒絶などを経験して苦しい時、親に聞いてもらい、無条件に受け入れてもらい、傷ついた心のケアを受けながら、「失敗しても大丈夫、又、挑戦してみよう」と基本的信頼を強めて行くのである。ところが無視や放置、放任や虐待の中で育ってしまうと、親を信頼出来ず、恐怖、憎しみ、不信感、反感さえ持つようになる。親に対して持っている負の思いの分だけ生きづらさを背負って生きることになる。
- ③ 十戒の第5戒「父と母を敬え」に対する反応は？親にも社会に対しても反抗し、その思いは神に向かっても投影される。神の創造による秩序に反抗を示すことに傷の痛み、深さが表明される。親子関係の歪みは人との関係にも影響を及ぼし、やがて自分の真の姿に直面する。神との出会い、祈りのミニストリーなどを経て、癒しを体験することを通して親子関係が修復されて行く。
- ④ 特に耐え難い虐待の中で育った場合、早い段階で自立し、適度な距離を置くことも大切である。虐待が繰り返されることで、親子関係が歪んだり、親子の立場が逆転したり、あるいは過度にくっついてしまう場合もある。自分は誰であるのかわからない、アイデンティティ喪失のケースが多い。時がきたら、信仰によって親を赦すことを選び、正しい位置に両親を置き、自分も子供の位置に戻り、親と自分は別人格であることを新しく受け直して生きることである。そうすることで、父母を敬うことを始めることが可能となる。自分を生き始める。
- ⑤ 両親の救いのために祈り始める。第5戒の実践である。神の秩序に生き始めると、自分の姿も両親の姿も見えてくる。自分も含め、地上の父、母には限界があり、不完全な存在である事を、愛をもって受け止めることができるようになる。真のお父さんは天のお父さんであることがわかり、父なる神に置き換えるのである。父なる神がどんなに自分を愛してくれるお父さんであるか味わい、この父に常に呼びかけ、確信を持って生きることが可能となる。

### 2. ジェンダーレス社会の向かうゴールは

- ① 最近、米国議会下院議長ナンシー・ペロシ氏は「性別を含む言語を排除する行動規則案」を出した。アメリカ議会で「性別を含む言語は排除しよう。使ってはいけない。」という行動規則案を出したというわけである。
- ② どういう言葉がいけないのかというと、例えば「父、母」と言うてはいけない。父は男性、母は女性で、これは性別を含んだ言葉であるからと。何と云うのか、「親」と言いなさいということなのである。Father, Mother の代わりに Parent と言いなさいということである。あるいは息子、娘、兄、姉、祖母、祖父も性別を含んでいるので使用する行動規則案を出した。
- ③ 子供の養育に関しては政府が責任を持つという考え方が米国に広がりつつある。イスラエル建国直後頃にあることが行われた。それは子供達の世話を専門のスタッフに委ねるというこ

とであった。これは労働時間を有効に使うためで、お母さんたちは授乳の時間だけ子供のところにやってきて、それ以外は職場で働いた。これはキブツ全体で子供の責任を見よう。親ではなく、キブツが責任を持って育てるという発想だったが、大失敗に終わったのである。子供も大人も多くのが精神的に変調をきたし愛着障害を患う結果となった。子供は親から愛されていないと感じ、親は子供に対する愛を実行できないということが、いかに精神に破壊的な影響を与えてしまうかの例である。

④ ジェンダーレス社会のゴールは家庭の破壊である。

ジェンダーという言葉と性別、セックスという言葉は違う。性別というと人間の生物学的な特徴である。男か女かである。神は人を男と女に造ったのである。この二つしかないのである。ジェンダーという時、社会における性別のことを言うのである。ジェンダーレスというのは、男女の社会的な差がとり払われていること、及び、取り払おうとする考え方のことである。ジェンダーレスにしようというのは、社会における性別の垣根をなくそうということなのである。しかし、それが、時には生物学的区別を否定するところまで行ってしまふわけである。

⑤ 男女とも参画できる職業は色々あるが、これはジェンダーレスの用語でもスムーズである。例えば

(1) チェアマン (男) チェアウーマン (女)・・・チェアパーソン (ジェンダーレスの用語)

(2) ポリスマン (男) ポリスイーマン (女)・・・ホビース・オフィサー (ジェンダーレス)

(3) スチュワード (男) スチュワーデス (女)・・・キャビンアテンダント (ジェンダーレス)

これらは一向に構わない。しかし、肉体上の性別に関しては、創造の秩序としては男女の違いは存在するのである。

⑥ こういう性差を含む言葉を否定するというのは、創造の秩序として存在している性差を否定していくことにつながっていく。創造の秩序における肉体的な性差を存在しないかのように振る舞っていくのは非現実的である。男性と女性は、体の構造も考え方も、又、生殖器も全部違うのである。それをあたかも存在しないかのように、性別をなくして同じように使うということ、そして、肉体的性差でも可能であるかのように振る舞うことは現実を無視しており、神がお造りになった創造の秩序に対する挑戦なのである。ジェンダーレス社会が正にそうである。神は私たちお互いが違っているということ、男女が違うということ、私たちに性差の違いをエンジョイするように、自然界を創造されたのである。

⑦ ジェンダーレス社会を容認し、ジェンダーレス社会を作ることは、家庭の崩壊につながる危険性がある。家庭の崩壊とは生存の基盤の破壊である。つまり聖書的価値観への挑戦であり、第五戒への挑戦である。